

日本学術会議 科学者委員会  
学術体制分科会 (第22期・第3回) 議事要旨

1. 日 時 : 平成24年5月25日(金) 16:00~18:20
2. 場 所 : 日本学術会議 5-A(2) 会議室
3. 出席者 : 松沢委員長、氷見山副委員長、翁幹事、小原幹事、杉田委員、長谷部委員、吉川委員、尾家委員、北川委員、楠岡委員、田島委員、辻村委員、竹縄委員(欠席者: 上田委員、古谷野委員、戸山委員、桃井委員、北里委員)  
事務局: 石原参事官、中島上席学術調査員 他

4. 配布資料:

- 資料1 前回議事要旨(案)
- 資料2 強い文教・強い科技に向けての土俵設定
- 参考1 委員名簿

5. 議 事

(1) 前回議事要旨(案)の確認

一部修正のうえ、了承された。

(2) 参考人からの報告(財務省主計局 神田主計官)

財務省の神田主計官より、文教、科学技術の世界をどう見ているのか、少子化や大学の状況、今年度の文教科学技術予算のポイント等について財政の視点も含め、現状と問題点について報告があった。

これを受けて、参考人と委員の間で概略以下の質疑応答を行った。

(○: 委員、◇: 参考人)

○教育の公財政支出や大学の数についての議論では、国公立と私学の割合や、進学率の上昇なども考慮すべきではないか。

◇様々な議論がありえるが、人口が減ってきた現状、大学の数は多すぎる。大学改革を進めて大学を出て意味のあるようにすべき。

○同様の議論は大学院でもあり、企業が採らない人材を生産している面がある。定員は減らすしかないが、ドクターが必要という意見もある。

◇ドクター教育でどのくらい説得力をもつ力をつけるかが重要。

○選択と集中が課題であるが、その際に小さな基礎研究はすぐには実用にはつながらないが、それが失われると将来の芽がつまれてしまう。欧米の大学ではすぐにならないこともサポートをしている。

◇基礎研究は死守したい立場だが、現在の財政状況では超マイノリティ。基礎研究の現在の規模は許されると思うが、結局は血税を使う時のアカウンタビリティなので、科学者コミュニティが細分化の中でどう守れるかになっている。

○基礎研究を守るということについては日本の社会にその見識はある。CSTPで評価をやっているのは学者であり、むしろ学者コミュニティの問題が大きいのではないか。大学部局の配分でも、当初は正しい理念がありながら、結局横並びになることが多い。

○科学技術予算は増えたが成果は出ていないという評価について、分析はあるか。

- ◇よくやっている人とそうでない人の差が大きく、それにもかかわらず評価による差別化ができないので狭い世界で研究費の薄まきになっている。学生の緊張感も国際競争の中ではゆるい。
- 研究費投入が質の向上に寄与していない。競争的資金への傾斜によって研究以外の仕事が大幅に増え、これが活発な研究者ほど多く、悪循環になっている。
- ◇海外でも競争的資金を取る作業は膨大であるが、システムになっている。メリハリをつける必要なコストとして工夫が必要。
- 国際的に太刀打ちできるように規模を考える大学改革はわかるが、小さい大学のメリットも考慮する必要がある。
- ◇国際的に勝負するためには規模は重要。生き残る手段として統合を考えるが、大学だけが逆方向になっている。少しでも早く問題意識をもって進めるために国立大学改革強化推進事業をつけた。
- 教育では平等にしがみついており、社会に出た瞬間グローバル競争にさらされる状況。教育改革から必要。
- ◇日本全体で変えないといけませんが、レバレッジがあるのは大学改革ではないか。
- 国立大学改革強化推進事業は単年度では意味がないし、短期間の制度いじりになると弊害の方が多い。その評価はどのくらいのスパンで行うのか？
- ◇今年中にどのくらい動くのかが見える。それで判断。現在の数の大学は維持できない。限られたパイでどのようにしていくか見せていく必要がある。
- こういうやり方だと大学ではリベラルアーツに負担がかかって、見かけは改革されているように見えても教育の質は下がる。

### (3) 今後の進め方について

次回以降の企画については役員会で検討することとした。

### (4) その他

次回日程については、基本的に総会時に開催することとなっているが、追って調整することとした。

以上